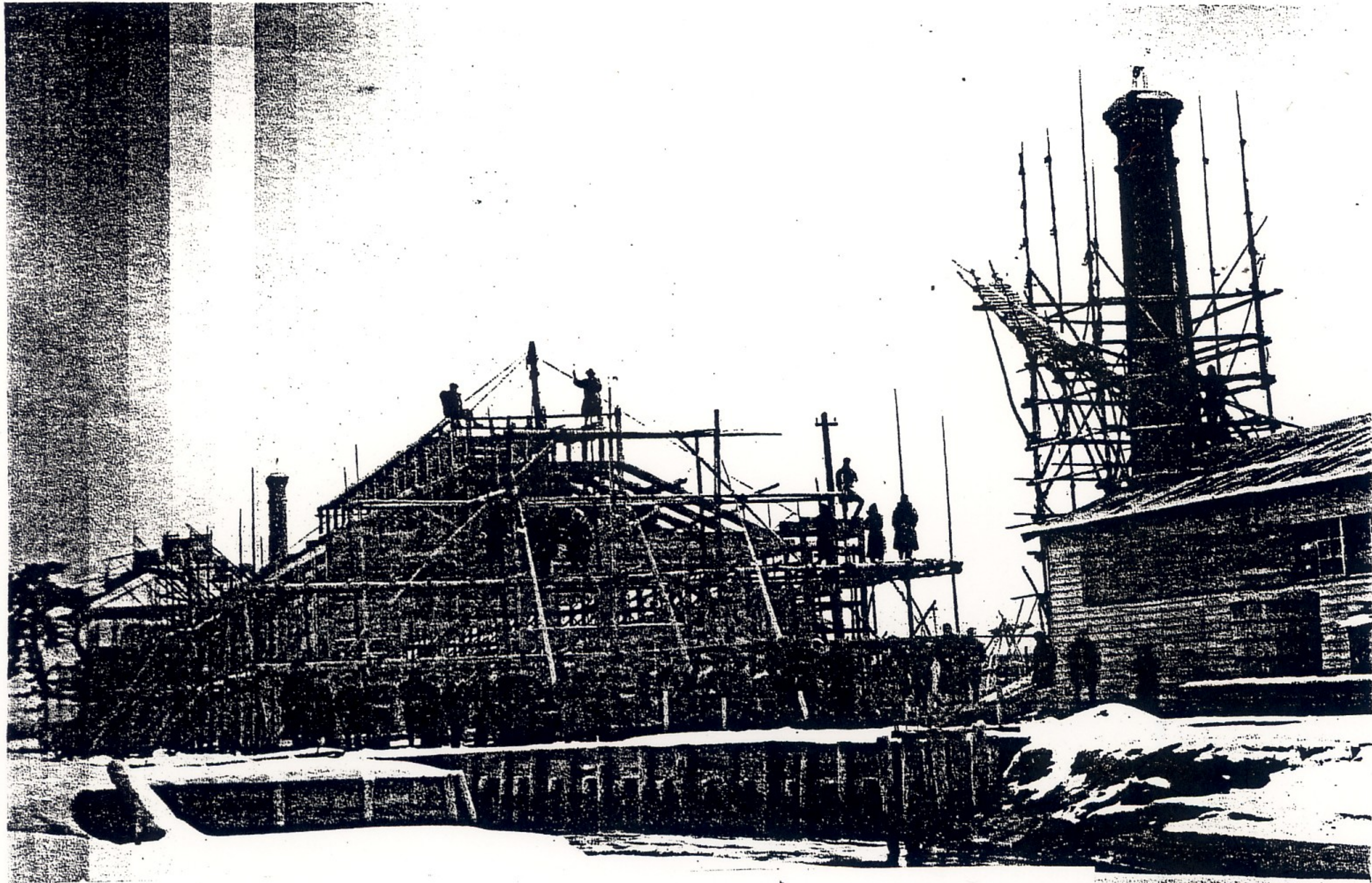


# 瓦版おはま

瓦版 おはま  
第14号  
編集発行  
木村慎一  
H-30-9-22(土)

## 消えたイタリヤ館 (四) 落成大正七年 (一九一八) 三月 地域水産加工業界に一大転機



大正6年(1917) 工事中のファブリー缶詰め工場

・下町市兵衛川左岸に工場と二階建て居住棟の建設工事が大正五年(一九一六)の冬から始まった。当時市兵衛川の両岸は雨が降ると川の水

が溢れ出す湿地帯で、工事はまず地盤を固める土木工事から始まった。写真では、大工よりも土木作業員が多く見られ、相当の難工事であっただろう。

・西田林八郎村長の斡旋で手に入れた土地は三千平米。ここに、百坪の洋館と百五十坪の工場を建てる計画であった。

工場は木造建築で、地元の下町の田沢大工が棟梁として参加し、洋館の設計と工事監督は、ファブリーが神戸から呼んだユーネスが担当した。ユーネスはシンガポール生まれで中国系イタリヤ人。親の代からのカーペンター(大工)であった。

・ファブリー缶詰め工場は社名を英語で「フランコイタリアン・パッキングカンパニー」と表示した。工場内には、本国から取り寄せた新品の二重式ボイラー、封緘巻き取り機、製缶機、調理台等が設置され、床にはトロッコの線路を敷いた。更に市兵衛川河口に、沖に向け三十米の棧橋を架け、十トンの動力船を繋留させた。

・当時青森には缶詰め製造業者が二軒あったが、まだ家内手工業程度であつたらしく、県内各地から油川のファブリー工場を見学に来る人が多かったと言う。この工場で生産された鯛の缶詰めオイルサージンは、神戸のイタリヤ系商會を通じて母国イタリヤや東南アジアへ輸出された。ファブリーが油川で本格的缶詰め工場を起業したことが、その後の青森市の水産業振興に大きな貢献をもたらしたことは間違いない。

### 町名標

《第十四回 日の出町の巻》

日の出町の町名標は平成十五年(二〇〇三)元氣町油川街づくり委員会が建てた。場所は中学校通り、町田クリニックスの向かいでも建っている。標文は次の通り。

昭和二十六年頃(一九五二)は十四・五軒の家があつた。朝のすがすがしい光りが何時も輝いているような町、という願いから、「日の出(ひのでちょう)」と名付けられた。今の中学校通りは、かつて、昭和八年(一九三三)青森飛行場が開港された年に、アクセス道路として造られたもので、昭和三十年頃(一九五五)までは、飛行場通りと呼ばれていた。

昭和十四年(一九三九)国鉄上磯鉄道、現津軽線が敷かれ、飛行場アクセス道路はほぼまん中で東西に横断された。昭和三十年(一九五五)当たりまで自動車が始ど来ない夏の夜は、東側、館町則の広い道を使って大き盆踊りの輪が幾つも立った。旧飛行場通り、現中学校通りは、今では油川町にとつて、巨大団地野木和団地と往来する、最も重用な道路となつた。